

みんなが海に行ってしまったあとの合宿棟は、しんと静かだった。

私は一人でリビングにいた。掃除をしていた。

昨夜みんなが飲んで散らかしたリビングを朝に見て、なんとなく片づけ始めたら止まらなくなってしまうただけだ。

（それに、どうせ泳げないし……）

窓を開けると山の風が入ってきて、カーテンが揺れた。

「気持ちいい……」

（一人で穏やかに過ごせるのも、贅沢かも……）

テーブルを拭いて、床を掃いて、それから棚の上に手が届かないほこりが積もっているのが気になった。踏み台になりそうなものを探して、椅子を棚の前に持ってきた。

フレアスカートで来たことを少し後悔しながら、

そっと乗った。柵の上に雑巾を走らせながら、まあ誰もいないしいいか、と思っていた。

誰もいない、はずだった。

「先輩」

声がした。

びくっとして振り返ろうとしたら、椅子の上でバランスを崩しかけた。あわてて柵の縁を掴む。心臓が跳ねていた。

「宮坂……くん？」

振り返ると、部屋の入り口に宮坂くんが立っていた。

今年の春に入ってきたばかりの後輩で、サークルに入った初日からサークル内がざわついていた。

背が高く、肩幅が広くて、顔が整っている。切れ長の目と高い鼻筋で、笑うとえくぼができる。女の子たちは最初から騒いでいたし、男の先輩たちに

も気に入られていた。体育会出身なのに威張ったところがなくて、愛想がいい。完璧みたいな後輩だった。

「え、どうして……？」

合宿に来てからも宮坂くんの人気は変わらなかった。同期の女の子が「宮坂くんと同じ班になりたい」とはしゃいでいたのを聞いていた。バーベキューの準備でも宮坂くんがいると場が明るくなって、先輩たちも普段より声が大きくなる。そういう人間がいる。誰もが一緒にいたくなるような人間が。宮坂くんはその類だった。

だからこそ、今ここにいるのが不思議だった。みんなに囲まれていた方が似合うのに、どうして一人でここに戻ってきているんだろうか。

「海、行ったんじゃない……」

「先に戻ってきました」

「どうして……？」

「先輩が海に来てなかったので♡」

「え……？」

「それより先輩。そこから降りてください。危ないので」

「あ、うん……っ」

宮坂くんが近づいてきた。大きな手が私の腰に触れて、降りるのを手伝ってくれた。体温が高かった。

私を床に降ろすと、宮坂くんは椅子を片手で脇へ寄せた。それでも腰に触れた手は離さない。

近い。

こんなに近くで宮坂くんの顔を見たことがなかったから、なんだか息が詰まった。

「あ、あの、手」

「先輩」

「え、な、なに……？」

「俺、先輩のおまんこが見たいです」

「えっ……」

時間が止まった気がした。

宮坂くんの顔を見た。真顔だった。

冗談を言っているような顔をしていなかった。普通の会話をしているみたいな、落ち着いた目で私を見ていた。

「……え、なに、今」

「先輩のおまんこが見たいです」

もう一回言った。全く同じ言葉を、全く同じ口調で。

サークルの人気者が、先輩に向かって、こんな言葉をこんなに真顔で言う。そんなことがあるのだろうか。

私の頭は完全に止まっていた。何を言われたかはわかっている。でも何を返せばいいかが全然わからなかった。

宮坂くんの目はまっすぐで、揺らいでいなかった。本気で言っているのだということだけはわかった。

「そ……そんなこと、急に言われても……」

「急じゃないです。ずっと思ってたんで」

「ずっとって……」

「だから、先輩のおまんこ見せてください」

宮坂くんはそう言って、私の前にしゃがんだ。

スカートの前に顔を近づけてくる。

「ちょ……っ！ 宮坂くん、何してるの……っ！」

「見ます」

「見ますじゃなくて、だめだから……っ！」

（やだやだやだ……っ。宮坂くんがスカートの前に顔を……っ。こんなの絶対だめなのに……っ！）

逃げようとしたけれど宮坂くんの手が私の太ももを掴んでいた。後ろは柵があって下がれない。前は宮坂くんの顔がスカートのすぐ前にある。

「宮坂くん、ほんとに、やめ……っ」

「ちょっとだけ。見るだけです、最初は」

最初は、という言葉の意味をうまく理解できないうちに、宮坂くんの指がスカートの中に入ってきた。フレアスカートの裾をそっと持ち上げながら、太もものあたりを確かめるみたいに撫でる。

「ひっ……」

棚の縁を掴んだ。宮坂くんの手が内ももに触れるだけで、なんだかゾクゾクして力が抜ける。

「柔らかいですね、先輩の太もも」

宮坂くんの指がゆっくりと上に向かった。付け根の際どいところを通りすぎて、ショーツの布地に触れた。

「あ……っ！」

「ここ」

割れ目の上から、そっと押し当てた。